2021年12月31日　発行　　(頒価年度6000円)
アフリカ研究　第100号
発行人　日本アフリカ学会©
〒603-8148　京都市北区小山西花池町1-8
株式会社　土倉事務所気付
ホームページ　http://www.african-studies.com
印　刷　株式会社　土倉事務所
TEL (075) 451-4844
FAX (075) 441-0436

小馬徹 著

『ケニアのストリート言語，シェン語―若者言葉から国民統合の言語へ』
御茶の水書房，2019年，238+v頁，￥3,000＋税

品川大輔 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

本書は，ケニアのナイロート系民族集団であるキプシギスの社会において長年にわたるフィールドワークを行ってきた社会人類学者による，スワヒリ語ベースの混合言語コード「シェン (Sheng)」に関する一連の論考をまとめた書籍であり，シェンの発生地とされる首都ナイロビや著者自身の人類学調査のフィールドであるケニア西部での参与観察の記録と，それに基づく社会人類学的考察の集大成である。第6章を除く各章はすでに別の媒体で公刊されている論考であるが，その後の発展的再解釈を反映する形で本質的な加筆が少なからず施されており，一冊のモノグラフとして完結された形にまとめ上げられている。また各章は初出発表年順に配列されており，それによって読者は記述対象である事象を時系列に沿って辿ることができ，のみならず著者の思索の通時的展開をも追走しやすい構成になっている。本書の章構成と各章の初出情報は次のとおりである。

第1章「ケニアの勃興する都市混合言語，シェン語―仲間言葉から国民的アイデンティティ・マーカーへ」，初出 (2004)：『年報 人類文化のための非文字資料の体系化 第2号』神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議

第2章「グローバル化の中のシェン語―ストリート・スワヒリ語とケニアの国民統合」，初出 (2005)：梶茂樹・石井溥 (編著)『アジア・アフリカにおける多言語状況と生活文化の動態』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

第3章「隠語からプロパガンダ言語へ―シェン語のストリート性とその発展的変成」，初出 (2009)：関根康正 (編)『ストリートの人類学 上巻〔国立民族学博物館調査報告 第80号〕』

第4章「宣伝広告から「国民文学」へ―*「混ぜこぜ」言語シェン語の力」，初出 (2009)：神奈川大学日本常民文化研究所 (編)『歴史と民俗25』平凡社 (* 初出副題は

「ケニアの新混成言語シェン語の力」)
第5章「TV劇(ドラマ)のケニア化とシェン語—ストリート言語による国民文学の新たな可能性」初出 (2011)：神奈川大学日本常民文化研究所 (編)『歴史と民俗 27』平凡社
第6章「シェン語による国民統合への道筋」(書き下ろし)

第1章は著者のシェンに関する一連の論考の嚆矢にあたり，その後の研究の基調をなす論文としてとりわけ重要な位置付けにある。その第一節において著者は，著者自身が切り拓いていくことになるシェン研究の学術的意義を，i) 流動的でダイナミックな言語接触が絶えず生じる「混合言語」としての性質，ii) 独立以降の言語を通した国民国家形成のプロセスの中で期待される社会的機能，そして iii) 制度や権力の反映としての正書法ならびに標準化 (standardization) との関係，という3つの側面から立体的に論じている。そのうえで，独立期ナイロビの庶民層の居住区域 (residential estate) において自生的に発生した口語変種としてのシェンが，いかにして「都市性」や「職業階層」また「年齢層」といった社会的属性を反映する「自己同一性の標識 (identity marker)」になり得ていったのかというプロセスを描き出す。そして最終節において，そのような個別の集団的属性を代表する存在であったシェンが，「国民的アイデンティティ・マーカー」へと発展を遂げる可能性を提示する。以降の一貫したテーマは，この可能性を参照点とする，変成する言語コードとしてのシェンの政治，経済，教育，芸術，風俗といった社会のさまざまな文脈に観察されるダイナミズムの記述と考察である。しかし，それは単なる平面的な事実の記録とその羅列ではない。徹底した参与観察をベースにしつつも，読者の意表を突くような発想 (しかし，これも突き詰めればやはり現地に根差したまなざしがあるからこそ可能になっている) によって思いもよらない事象同士を結びつけて鮮やかに着地させる，ストーリーを持ったモノグラフとして完成されている。さらに付け加えれば，著者の叙述の説得力は共時的な観察によってのみもたらされるわけではない。綿密な資料的裏付けにもとづく背景としての歴史叙述が，論の展開をソリッドに支えている点も強調しておきたい (第2章で展開されるスワヒリ語をめぐる言語政策史は，アフリカ社会言語学を学ぶ者にとっては必読である)。

以下，第2章以降については，紙幅の制限から各章の内容を手短に紹介するにとどめる。第2章では，「若者言葉」(アフリカ言語学では，Kiessling and Mous (2004) 以降，African Urban Youth Languages (AUYL) というタームが定着しており，シェンはその代表的なコードの一つとして認識されている) としてのシェンの影響力が拡大していった要因を探る。具体的には寄宿制を含む学校教育制度とヒップ・ホップを代表とするポップカルチャーに焦点が当てられているが，思索の背景として“それによって思考し表現する言語”をめぐるアフリカ文学における積年の論争を配置することで，シェンをめぐる一連の現象が (単なる「若者文化」の問題に回収されるのではなく) ケニア国民のアイデンティティの表象の問題として読み解かれるべき現象であることが説得的に示される。第3章では，翻ってシェンの「停滞期」の状況が描出される。ここでは，教育文脈でのシェンの使用に対する警鐘や国家的な財政難による学生の就職難が結果としてシェンの影響力の一方向的な拡大を抑制することになった一方で，経済文脈においては商業キャンペーンの (またそのようにカムフラージュした政治プロパガンダの) 言語コードとしてそのプレゼンスを維持しているといった状況が記述される。このような，一面的に見ればシェンにとって衰退の予兆に見える状況も，マルク・オジェの「場所」概念を補助線にすることでこの言語コードが無機質な都市空間を「場所化」させる機能を備えつつあるという別の，しかしシェンの全体像を把握するうえでは欠くことのできない側面を鮮やかに描き出す。第4章では，上述のアフリカ文学上の積年の問題 —— アフリカ文学という文脈で“それによって思考し表現する言語”とは何か —— に対してシェンがどの程度説得的な解答になりうるのかについて多面的な議論が展開される。第5章では，衰退したかに見えたシェンが TV ドラマの中で用いられるようになった現象 —— シェンの使用による TV ドラマの「ケニア化」—— の分析から，シェンが国民文学の形成に実質的な貢献を為しうることを，延いては (政策的な介入とは異なる形で) 国民的な言語へと発展する可能性を論じている。そして，本書のために書き下ろされた最終第6章においては，ローカルな文脈におけるシェンの影響力の発露としての「シェン化した民族語」(具体例として Kioko (2015) が報告する ‘Shengnized Kamba’) に焦点が当てられている。この都市という文脈を離れた新たな言語的実践の浸透に，タンザニアが標準スワヒリ語 (Kiswahili Sanifu) —— 著者によるこれまでの論考では，その本質を反映させる形で「造成スワヒリ語」という名称があてられていたが，本書では「新標準スワヒリ語」と言及されている —— によって為し得たそれとは対照的な形での言語的国民統合へと至る可能性を見て，論が閉じられる。

このように，凡そ事象の一部にのみ固執していては到底俯瞰しえないであろう視野をもって，シェンの多様な側面を実証的かつ複眼的に観察し，記述し，現象の背後にあるメカニズムに迫り，さらには来るべき状況への展望までを提示する本書が，シェンそのものの，またシェンが用いられる社会の動態の理解に，これまでにない形で光を当てていることは疑いがない。そのような広い視野によって構成される本書に対して，言語学的な立場にのみ立脚したコメントを述べることで本書の提示する知見を矮小化する危険性を懼れるが，一方で本書の視点を言語学的なスタンスと対置させて相対化することで，より立体的な現象理解の可能性が開けることもあろう。以下，その意味で (いささか表層的ではあるが) 整理すべきポイントを3点提示する。

最初の点は，対象の同定に関する問題である。シェンを指すスワヒリ語の呼称として，本書第2章では ‘maneno ya mtaa’，第3章以降では ‘lugha ya mtaa’ が挙げられている。これに関連して，しばしばシェンと対比的に言

学的布置関係の大きな構図を，第1章初出時の2004年の段階にはすでに見据えていたということになる。

著者が第1章の締めくくりに述べるように，シェンはさまざまなディシプリンから見て魅力的な研究対象である。言語学者にとってシェンは複数の言語コードの接触による新たな文法的規則性の発生メカニズムをつぶさに観察できる対象であるし (cf. Shinagawa, 2019)，社会言語学的な関心からは，例えばアフリカの都市部における多言語環境 (multilingual ecology) を理解するうえで欠くことのできない洞察をもたらしてくれる。しかし本書がシェン研究に与える本質的な重要性は，そういった個別のディシプリンが期待する枠を超えた地点にあるというのが評者の理解である。本書が提示しているのは，時間と空間と多様な文脈とを一望の下に見据えた，シェンをめぐる壮大な実証的叙述である。人類学的なフィールドワークによってコミュニティの内部から観察し，また関連する多様な文脈を参照することでその行く末を射抜くような洞察に至る本書は，社会人類学者としてフィールドに根を下ろし，またフィールドから地続きの視点で首都ナイロビやケニアという国家全体をスコープに収める著者にして初めて為しうる，独創的でありながらきわめて実証性の高いモノグラフであり，そのことこそが本書の真価であることは強調してしすぎることはない。

参考文献

Githiora, Chege (2002) "Sheng: Peer Language, Swahili Dialect, or Emerging Creole?" *Journal of African Cultural Studies* 30 (2): 105–120.

Githiora, Chege (2018) *Sheng: Rise of a Kenyan Swahili Vernacular*, Suffork and New York, Boydell & Brewer Ltd.

Kiessling, Roland and Maarten Mous (2004) "Urban Youth Languages in Africa," *Anthropological Linguistics* 46 (3): 303–341.

Kioko, Eric M. (2015) "Regional varieties and 'ethnic' register of Sheng," in Nassenstein, Nico and Andrea Hollington (eds.), *Youth Language Practices in Africa and Beyond*, Berlin, De Gruyter Mouton, pp. 119–147.

Lüpke, Friederike and Anne Storch (2013) *Repertoires and Choices in African Languages*, Berlin, De Gruyter Mouton.

Reuster-Jahn, Uta and Roland Kiessling (2006) "Lugha ya mitaani in Tanzania: The Poetics and Sociology of a Young Urban Style of Speaking, with a Dictionary Comprising 1100 Words and Phrases," *Swahili Forum* 13.

品川大輔 (2012)「2010年憲法施行後のケニア都市部の多言語状況」砂野幸稔 編『多言語主義再考』三元社, pp. 530–563.

Shinagawa, Daisuke (2019) "The Syntactic Distribution of Relativizers and the Development of *-enye* Relative Constructions in Sheng," in Shinagawa, Daisuke and Nico Nassenstein (eds.), *Swahili Forum 26 - Special Issue on Variation in Swahili*, pp. 122–141.

Shinagawa, Daisuke (2021) "Aspects of Linguistic Dynamism in Sheng as Kenyan Colloquial Swahili: Focusing on De-standardisation and Re-vernacularisation," in Takemura, Keiko and Francis B. Nyamnjoh (eds.), *Dynamism in African Languages and Literature: Towards Conceptualisation of African Potentials*, Mankon Bamenda, Langaa RPCIG, pp. 89–119.